

重慶 U・P 新聞電報放送 (十六日) (臺灣總督府交通局遞信部聴取)

一、重慶發

蒋介石は日本軍の支那國民無差別爆撃には三つの目的がある。一、テロ行爲による支那人暴壓、二、大衆生活、生産施設の徹底的破壊、三、奥地に於ける混亂と無秩序の發生として居る。彼の説による。

敵は支那救國の基礎が大衆の上に立てられて居る事を十分に知悉して居るから支那民族を絶滅せんが爲には先づ支那國民を斃さねばならぬと考へその手始めとして重慶市民虐殺の舉に出るに至つた。支那國民は敵國日本の此の史上未曾有の無慈悲極まる爆撃には精神的道徳的に義憤を覺えただけで支那民族絶滅は愚か實に平靜な態度を示した。今後日本軍は支那民族の住む各市町村を狙ふであらうが一つとして爆撃だけで滅ぼすことは至難と思はる。政府機關と軍事機關の密集する都市が頻繁に爆撃を受ける事は歴史に徴するも明らかで只かかる土地は防空施設の完備せる爲敵が低空から襲撃するが困難の爲注意を傾ける。

都市防空は政府の最も力を注ぐ所で防火芝生の創設、土嚢の準備、非常用貯水等には極

力努めて居り市民も忠實に政府の命令には服従して呉れる。かくて日本側の第三回目の企圖を無効ならしむる爲市民側では平靜と秩序正しく官邊側では民衆保護に有効適切な方法を講じ前線にある者も銃後にある者も抗戰意識を捨てず失地回復を念とせねばならぬ。斯くの如きは何處に於ける民族闘争に於ても不思議な事には非ず。

支那軍部ポークスマンの談話によれば「京漢鐵路と漢水との中間地區に於て支那軍を包圍せんとした日本軍の企圖は完全に失敗に歸した。揚子江北岸の日本軍の主力は四ヶ師團の兵力で兩翼包圍陣形を取り安陸桐柏に北上、尙も南陽目指し進まんとした。日本軍騎兵は漢水一帯を一掃し新葉を奪ひ唐河をも占領するに至つたが、忽ち支那軍の爲奪回され結局三千の死傷を出して退却するに至つた。唯小部隊の日本軍は襄陽に進んで居るが要衝を奪ふ事も漢水渡河も出来ぬ状況にある」と。又外國觀戰武官の説によれば「日本の軍略は支那軍の主要根據地南陽を攻めてから次に隴海平漢兩鐵路の交叉點鄭州を占領せんと企ててゐる」と。軍部ポークスマン曰く、「日本軍は山西省南部の孟津附近の村落を占領せんと企てて居るが之は鄭州の西方に於て黄河の渡河を行ひ開封南陽孟津の三地點から隴海線並びに西安を襲はんと企圖してゐるからである」と。

## 極秘

内閣情報部五・一九 情報第四號

成都中央通信社國際放送（十六日）（臺灣總督府交通局遞信部聽取）

### 重慶發

(1) 蔣介石は最近一週間に亘り開催された物資増産會議ノ席上に於て試みた演説中非常時物資生産の對策に關し説述する所ありしが本日其内容が詳細發表された、蔣は戦線の後方に於ける生産増加が前線に於ける抗戰同様重要問題なる點を強調して左の如く述べた

余は増産會議の指導的原則として下の六點を擧げんとす

第一資金を中央化して増産を計劃すること、第二軍事行動が繼續する限り總ての産業に國防を中心として進展せらるべきものなること、第三固有産業の發展を期し國家經濟に自給自足の基礎の上に確立すべく努力すること、第四國産品の品質向上を期する爲科學並に技術的方面の研究を奨励すること、第五産業資本充實の爲國民の節約を勵行すること、第六勞資の融合團結を圖ること

以上六點は増産策の根幹を成すものであるが余は別に外國資本の投下されんことを希望する、尤も時代の變遷に伴ひ往時の如き廣範に亘り外國資本を輸入することは困難となるが我等は勉めて之を誘致すべきであると同時に自力に依り復興を進捗せしめねばならぬ